

# 被災地へ 届け!

「悲しみの闇の向こうにはきっと何時か、朝日が輝く日が来る事を信じて、がんばってガンバッテ行きましょう」

(K・Kさん 東久留米市)



## 復興をみんなの手で

「被災者の方々が、水くみや仮設トイレの設営に力を注いでおられる様子をテレビで拝見して、本当に人としての気品を感じました。日本中、いえ、世界中で、みんなが応援しています。生きていくことが大切です。よね!!」

(N・Sさん 東村山市)

「自分に出来るほんのちっぽけなことでもみんながそれを心がけて実行したら、大きな力になると思います。今は本当に辛いと思いますが、一日も早く状態がよくなるようお願いしています」

(M・Kさん 東久留米市)

「流した涙の数だけ、笑顔がやってくると思っています。少しずつ、一つずつやっていきましょう。一人じゃない、みんな、みんなつながっていますよ」

(K・Rさん 清瀬市)

泣きたいときにはどうぞ我慢しないで号泣してください。その慟哭とたとえようのない痛みを分かち合い、そして共に立ち上がります。今こそ愛と勇気と知恵をもって。私たちは決して屈しません!

「現地に行って直接支援の手を差し伸べられないもどかしさを感じています。計画停電の不便さに耐えながら、もっと大変な思いをしている被災地の方々に、自分ができる支援をカタチに表したいと思っています」

(O・Mさん 小平市)

「つながりの大切さを知った」、「ありがたみが身に浸みた」、「希望の光があると信じて進むしかない」という被災者の前向きで力強い言葉に逆に励まされ、心から「すごいー」と思いました。ひたすら節電に協力し、募金をし、一日でも早い復興を祈っています」

(Y・Kさん 小平市)

「復興への道のりは大変なことですが、皆で目標に向かって力を合わせ達成しましょう。震災から立ち上がった私たち、日本人ですから」

(N・Iさん 西東京市)

# 「計画停電」初体験の混乱

3月11日、日本人であるならば、この先決して忘れられないこの日から6日後、災害対策本部が設置された小平市の防災安全課を訪ねました。課内は3月13日夜、突然発表された計画停電以来、市民からの電話がひっきりなし。ほとんどがインターネットで情報を得られない人々から「何時から停電か？」という問合せ。通常の7名の職員では足りず他の課からも応援を頼み、武藤課長の机上でも3人の職員が、増設された電話で対応にあたっていました。

東京電力本社から発表された情報が武蔵野支社を経由して市へ届き、それがリアルタイムで市のホームページにアップされます。市の携帯サイトからも、またメールマガジン登録すれば防災緊急情報がパソコンや携帯に届きます。市内30ヶ所以上に設置されている同報無線と広報車6台（最多の時）を使ってのお知らせも実施されていますが、正しい情報を得ることで、どれほどの安心感を得られるかがわかります。

東久留米市のSさんは誰もが翻弄された、計画停電初期の刻々変わる

東電の情報を、あらゆる情報網にアクセスして、グループ別実施時間帯の一覧表を作成。それを近所に配ったところ大変喜ばれたそうです。これぞ近所の底力、防災力は地域力、これからの地域の課題です。

先の見えない今回の計画停電、また福島原発事故による放射性物質の影響は、私たちの暮らしを根底からゆさぶっています。歯科医師で、自ら大震災犠牲者の歯型検査にボランティア参加申込みをしている野口いづみさん（鶴見大学歯学部准教授・西東京市在住）がこのようなコメントを寄せてくださいました。

「夜間の停電は心細いですが、私は普段はしないヤカン磨きをしていました。

停電でも意外と有効に使えることがわかりました。日常的な仕事を



がんばる防災安全課の職員の人々（3月17日の様子）

こなすことで、平常心を維持できることも。パソコンやテレビがなくても、できることは多いですね。また、職場もスーパーも街も暗くしていますが、セーブできる電力が多いことに気が付きます。余談ながら、私は以前から、トイレ便座の加温を非エコ的に感じていました。この際、賢沢とサービス過

## 被災地支援にさまざまな活動開始

東久留米市では「コミュニティホール東本町」での被災者受け入れを3月16日から期限つきでスタート。東久留米駅前前の銭湯「源の湯」2階にある施設で、原発の周辺住民が当初28人（3/27現在は12人）避難してきました。子どもたちを児童館へ引率したり、地域のボランティアが温かい支援の手をさしのべました。

小平青年会議所では小平駅前など3ヶ所の駅前で募金活動を実施。また3月18、19日を皮切りに、事務局がある同市大沼町の泉蔵院でこれまで3回、市民からの支援物資を受付。無洗米、缶詰、レトルト食品、粉ミルク、紙オムツなどの指定された生活用品に限られますが、集めた物資は江東区の配送センターへ運び、東京地区の青年会議所分がまとめられ、被災地の青年

刺に消費されている。無駄な電力を見直してはいかがでしょうか。今後、電力を原発に頼らずに生活できるようにするために。買いためは被災地へ送る物資の不足を招き、現地での生活の低下、復旧の遅延を招きます。被災地の方々の苦しみを想像し、私たちは控えるべきだと思います」

会議所を通して避難所に配られます。石橋正春理事長をはじめとす



集まった支援物資を前にして、青年会議所のメンバー（3/18）

る理事の方々は「自分たちのできることからやっていきたい。みなさんの善意をしっかりと被災地へ届けます」。組織力と若い力で支援の推進役となってくれるでしょう。

（問）042(343)4855

3月25日には小平市と小平市社会福祉協議会が協力して、災害義援金の募金活動を実施。小平市役所正面

玄関でのセレモニーにはFC東京の大熊監督はじめ塩田、阿部、椋原の各選手、市のキャラクター「ぶるべー」も参加。集まったサッカー少年たちも募金していました。その後、学園坂を経由して一橋学園駅北口で小林市長、海上社協会長、FC東京の選手たちが一丸となって募金を呼びかけました。

このように市や市民団体等の支援活動の輪が広がっています。長期にわたる復興への道、私たちも暮らしの何かを少しでも我慢して、被災地の皆さんとともに、この国難を乗り越えていきたいものです。

募金活動をするFC東京の選手たち  
(3/25 小平市役所正面玄関)



## 鳥井守幸氏からのメッセージ

大学の教え子E君の自宅は震災・

津波の被災地の一つ、福島県いわき市。あの日たまたま東京に出張中だったが、交通・通信途絶で、自転車で13時間かけて、故里の惨状を目にした。「海岸沿いの親戚が所在不明」「どこかの避難所にいるらしいが直接連絡とれず」と次々にメールが届いた。数日後、福島原発事故の内容が深刻化するとメール内容は一変した。「いろいろ取材しましたが、これは人災です。まだ東京電力の隠蔽があるようです。これから東京に避難します!」

東京は原発事故による電力不足の影響で連日のような「計画停電」で、第3グループのわが家も何度か夜の闇を味わった。「外に出てみたら、お月さま、お星様も綺麗ですよ。暗闇だから味わえるんですね」友人Y子さんからのメールだった。

私は太平洋戦争下、福岡県大牟田市で体験したB29襲来による空襲警報発令下、灯火管制による夜の闇を思い起こした。少しでも民家から灯りがもれていると「おい、灯りを消せ! 敵に見えさせるぞ!」の警防団員の声がいまも耳に残っている。

もう一つ、戦後行なわれた電力不足による「ローソク送電」である。地域全体を停電させるのではなく、電圧を落として電力消費を加減するアイデアだった。薄暗い中での夜の暮らし。ある世代以上の方はご存じだろう。

新聞記者時代やテレビ報道でも地震を取材した体験が甦ってくる。新潟地震(1964年)は空からの取材、秋田沖地震(1983年)では加茂海岸の津波で児童13人の生命が失われた様子を取材、早朝の能代港からテレビで生レポートした。阪神淡路大震災(1995年)はTBSラジオに生出演中で、早朝のスタジオのモニターテレビに映る惨状をみながら報告したことを鮮明に覚えている。

どの震災でもそうだったが、深く心に残っているのは多くの犠牲者が出たのにも関わらず、被災者たちの沈着、冷静な行動、関係者やボランティアによる救出、生活保持のための懸命の努力だった。今回の地震について米国、韓国など海外の主なメディアが「日本人の冷静さ、これが日本人の力だ」と称賛していたのが印象的だ。

首都圏ではもう一つ、交通途絶によ

る「帰宅難民」の問題が生じた。首都圏直下型地震の場合の「帰宅難民」の想定数は都内で300万人、関東1都3県で650万人(中央防災会議予測)といわれる。今回その規模は小さかったが、多くの「帰宅難民」が駅周辺や途中のホテル、公園、公共施設に集中、かなりの混乱を生じた。

家庭を気遣う気持ちからだろうが、職場に留まれないものか。職場にイザという場合の防災グッズや自転車を置いておく、などの心得が必要だろう。また、多摩地区でも学校、公民館、公共施設を開放し、トイレの使用、食料、飲料水の提供など、日常的に官民による避難ネットワークもつくっておくことが大事だろう。

細かいホームページ情報にアクセスできない高齢者中心の「IT難民」にも各戸へのチラシ、自治会を通しての通報など、情報提供をお願いしたい。

鳥井守幸

帝京平成大学客員教授

元サンデー毎日編集長・TVキャスター

小平市在住

